【1】

氏　名（本　籍）	金（きむ）　昌（ちやん）　男（なむ）（韓国）
学位の種類	経済学博士
学位記番号	博甲第404号
学位授与年月日	昭和61年5月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
審査研究科	社会科学研究科
学位論文題目	**経済発展と労働市場構造 ー韓国の経験と開発途上国ー**
主　査	筑波大学教授　経済学博士　渡辺利夫
副　査	筑波大学助教授　経済学博士　工藤和久
副　査	筑波大学講師　経済学博士　久保雄志

論文の要旨

(1) 本論文は，二重経済発展論の枠組を用いて，1960年代初期以降の韓国の工業化がその労働市場，労働移動，農業発展にいかなるインパクトを与えたかを分析し，合わせて経済発展過程における一画期である「転換点」を，韓国がいつ頃通過したのかを確認しようという試みである。全体は，第1部「二重経済発展論の理論構造」，第2部「韓国の工業化・労働市場・農業発展」の二つに分かれ，第1部は，第1章「本稿の課題と要約」，第2章「二重経済発展論の理論と現実」，第3章「労働移動と農業発展」，第2部は，第4章「工業部門の雇用吸収力と労働移動」，第5章「労働市場構造の変容と零細企業」，第6章「農業発展の韓日比較」から構成される。

(2) 第1章では，本論文の課題が提示される。労働力以外にみるべき資源を有しない韓国が，低賃金の余剰労働力を豊富に利用した工業化の戦略を採用したのは合理的な選択であったこと，そしてその発展過程が二重経済発展論の想定に近いのであったこと，韓国の発展経験の分析は二重経済発展論の有用性をうらなう一つの重要な研究対象であること，が提示される。

(3) 第2章では，実証研究の理論的背景を明らかにすべく，二重経済発展論（ルイス・モデル，フェイ＝レイニス・モデル，ジョルゲンソン・モデル）のエッセンスを抽き出し，加えて労働供給条件，資本蓄積，労働需要の三つの観点から，それらの現実妥当性を検討する。

(4) 第3章では，二重経済発展論の精緻化を図るべく，さらに考察されなければならない二つの主要な開発課題すなわち労働移動と農業発展に焦点をあて，そのための理論としてハリス＝ト

ダロ・モデル，速水＝ルタン・モデルをとりあげ，それぞれの現実妥当性を検討する。

(5) 第4章では，二重経済発展モデルに沿う発展過程が齟齬なく展開されるための一大条件である工業部門の雇用吸収力についての分析がなされる。韓国の工業化が労働過剰・資本不足という要素賦存条件に適合する労働集約的生産方法に依拠して進められたがゆえに，工業部門の雇用吸収力は他のアジア諸国のそれに比較して格段に強いものであったことが立証される。

(6) 第5章では，工業部門の雇用吸収力に応じて農業部門の余剰労働力が消滅し，その賃金が上昇を開始するいわゆる「転換点」の時期を確認しようとする。韓国経済の転換点が1970年を前後する数年間にあったことを，未熟練労働者の雇用，賃金，労働力率，農工間賃金格差，賃金・限界生産性比較，を通じて明らかにしている。

(7) 第6章では，転換点の通過とともに農業発展が誘発されるそのメカニズムを，韓国ならびに日本の農業発展過程を対象として実証する。余剰労働力の消滅に由来する賃金の上昇，工業化に伴う農業投入財の豊富にして安価な供給のゆえに相対要素価格が変化し，これとともに要素代替・技術進歩が発生し，それゆえに農業生産性の上昇，農家所得水準の上昇がみられたという論理を数量的に検証している。

審　査　の　要　旨

(1) 現代韓国の経済発展に関する本格的な研究は，まことに少ない。二重経済発展モデルの枠組を用いて，韓国経済発展の姿を整合的に展開した試みとして，本論文の価値は高い。従来の開発経済学の基礎理論を十分に吟味し，妥当な作業仮説を設定し，そのうえになされた緻密な数量分析の成果として，本論文には高い評価が与えられる。

(2) 韓国の工業化が雇用吸収力の強いものであったがゆえに，農業部門の近代化を促す強力な力が発生し，いちはやく二重経済を解消しえたという論理は説得的であり，この論理を整然と分析した著者の力量は大きい。この分析は，アジア開発途上国における二重経済構造を分析するためのリファランスとしても有用である。転換点命題の実証も手堅く，その韓国経済に関する先行研究をこえている。

(3) 工業化に伴って農業部門において相対要素価格が変化し，これに応じて要素代替・技術進歩が発生し，要素生産性と厚生水準に少なからぬ変化を与えたという因果的説明は十分に説得的である。速水＝ルタン・モデルの韓国への適用例として評価されるのみならず，韓国農業発展の「圧縮型」を見出したことは斬新というべきであろう。

(4) 二重経済発展論ならびにその周辺の文献のほとんどを猟猟してこれを十分に検討し，さらに徹底したデータ分析を試みた本論文は，開発論上のいくつかの新しい観察を含み，現代韓国経済分析としてのみならず開発経済学分析としても，きわめて高水準の成果であるといえよう。他

国との比較研究の面でより一層の研鑽がなされるならば，より有益な研究成果が期待される。

よって，著者は経済学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。